

草場佩川

その10

没後150年記念行事

「ひやあごまつり」(佩川を偲ぶ会)
草場佩川没後150年忌)を開催します

草場佩川の会

草場佩川は、慶応3(1867)年10月29日に亡くなりました。その10月29日(日) 佩川の命日に「草場佩川を偲ぶ会」を開催します。

地元で親しまれてきた名前を入れて「ひやあごまつり」と名付けました。「ひやあご」とは、多久川のことを「這川」と地元の人は呼び、そこから訛つてできたことばです。地区名を示す言葉にもなっているようです。「佩川」はまさに「這川」からきている名前。地元の人たちは、「這川」のほitoriから出た佩川をととても誇りに思い、敬愛しました。

戦前、地元の子どもたちは佩川が葬られた大古場の墓地に墓参りをし、椋の瀬橋付近では佩川一族の眠る大古場墓地に向かつて、一礼して過ぎたと言われています。

当日は、地元「ひやあご」の漢詩人副島健三さんの献詩をはじめ、琴にも造詣の深かった佩川を偲ぶ献奏、そして吟詠では、佩川と親交の深かった江戸末期の日本を代表する漢詩人である日田の廣瀬淡

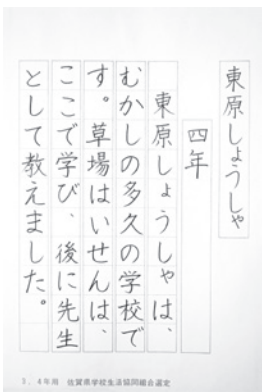
窓、山陽の頼山陽などとの交流を取り上げた構成詩を葉隠吟社と豊明会で吟じていただきます。

草場佩川没後150年記念 釈菜書道展

書道展は、没後150年行事の中で最も重要視してきました。次代を担う子どもたちに、草場佩川の名前を知ってもらおう絶好の機会と考え、書写部会にお願いしました。結果、佩川にまつわる次の2つを採用していただきました。

①硬筆4年生の部、タイトルは「東原しようしゃ」です。

「東原しようしゃは、むかしの多久の学校です。草場はいせんは、ここで学び、後に先生として教えました。」

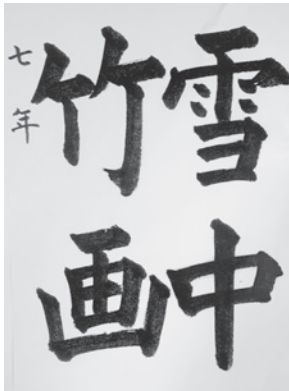


①硬筆 四年生

(解説) 8歳で東原岸舎に入学した佩川はたちまち頭角を表し、まもなく藩校の「弘道館」に入学。23歳の時江戸では同郷の「昌平齋」の教授であった)古賀精里に学んだ。多久邑の領主にも重用され、

28歳で東原岸舎の教授となった佩川は教育面だけでなく行財政面でも活躍。49歳で藩校弘道館に招かれ、のち教授に。藩主直正公にも信頼が厚く有為な人材を数多く育てました。郷土(多久)として佐賀の誇りといえる人物です。

②毛筆7年生の部、タイトルは「雪中竹画」です。



②毛筆 七年生

(解説) 2万首にもおよぶ漢詩を作った佩川は、書画にも優れ、特に「竹」図には比類のないものが多く、その代表作が「雪中竹画」。

佐賀城本丸歴史史館が出した偉人伝『草場佩川』の著者高橋博巳氏は、肖像画を残していない佩川の実上の自画像と位置付けてあるほど。25歳で対馬での朝鮮通信使との応接にあたった佩川は、漢詩と書画のレベルの高さから「天下の奇才!」と通信使に絶賛されるほどでした。通信使事務方の筆頭李頭相から別れに際して貰った「印」をこの作品の落款として使用するほどに大事にした、という作品でもあります。

お手本は長年多久の学校にお勤めで、今でも多久を大好きとおっしゃる中島由美先生にお願いしました。

多久市内の東原岸舎小中3校に通う児童・生徒のみなさん、これを機会に草場佩川の名前をぜひ覚えてください。

問い合わせ

草場佩川の会 桑原峰俊 ☎75-6824